

原子力の事業仕分け

文部科学省原子力課長 篠崎資志

去る10月29日に特別会計の事業仕分けの議論に参加した。国会議員と民間の有識者から構成される仕分け人に対し、担当する事業の説明をし、いろいろな質問に答えながら最後は仕分け人側からの評価結果が提示される。公開の場でしかもストーリー中継をしながら行われるので、どのようなやりとりがあったかをご覧になった方もいるかもしれない。仕分けをする側、傍聴する人の意見や感想はよく報道で出てくるので、ある程度ご存じだと思うが、説明する側の感想はあまり取り扱われないのでこの場を借りて少し述べてみたい。一コマ1時間の配分の中で、まず説明側が5分程度で概要を述べる。説明資料は指定のフォーマットがあり、事前に仕分け人側に提出されているので、本番ではあらかじめ内容を読んでいるという前提で説明してよく、その後50分程度の質疑応答が続く。

政策論はもとより、具体的なデータの説明など議論の対象は幅広く、どのような質問がどういう観点でされるか全くわからないので、その場で立ち往生しないよう（公開の場なので往生してしまうと格好のマスコミの餌食になる）説明側としてはあらかじめどのようなことが論点になるかいろいろと想定しながら、それに対する説明ぶりを準備するのだが、これが大変で、私の場合は前日、前々日と徹夜に近い状態で数十の論点と格闘した。これが功を奏したか、当日の議論は質問者からの質問はほぼ我々が考えていた範囲内で、一部細かいデータの回答に少しとまどったが、およそ先方の問題意識（これが議論している最中は時々刻々ともめぐるしく変わり、ついていくのがかなり大変なのだが）に対する我が方の考えをそれなりに示すことができたと思う。一点を除いて。

その一点とは何か。それは「原子力は難しくてわかりづらい。わかりづらいのをいいことに原子力は専門家が自分の世界だけで議論しており、我々専門外の人間を排除している。」という指摘。仕分け人は有識者といっても、主として大学、民間の経済アナリストや財務会計の専門家が大部分で、原子力、エネルギーの専門家は皆無。その専門外の人に2枚の紙と5分の時間で100億近くのビッグプロジェクトを説明して理解させよというのがそもそも無理難題と言えるのかもしれないが、この議論は果たしてそういう理由で終わらせてしまっているものなのだろうか？原子力の説明をするのは難しい。特に、バックエンドや放射性廃棄物になると、発電所のような電気という身近な存在から少し離れてしまうことに加え、ゴミ処理というネガティブなイメージもつきまとうことから、何も知らない「普通の人」に理解してもらうのは至難の業である。しかし、我々の活動のほぼ全てはその「普通の人」からの負担により賄われているし、その活動の影響は最後はこの「普通の人」たちに及ぶことを考えると、これらの人々に嫌悪感を持たれてしまうことは、結局は我々の存在意義そのものに関わる問題なのであると考えると、全く何もしないであきらめるという訳にはいかないのではないか。

ではどうすればよいのか？その解はそんなに簡単に見つからないだろう（見つかっていればもうやっているだろうから）が、既存の取り組みの延長にとどまらない新しい視点、アプローチをしっかりと考えること、少なくともその努力をすべきことが必要だと感じる。何を説明する、説明したという我々側の論理だけでは相手は評価してくれない。それがどれだけ相手に伝わったのか、それによって相手がどのように感じたのかという相手の視点に立ったものの考え方がこれから益々重要になってくると思う。これは私の担当する行政の世界だけでなく、今後、個々の事業活動、研究の現場においても共通する課題となろう。

(2010年11月)

